自然災害研究協議会 中国地区部会 研究論文集 第３号 17-20（2017）

学生の立場での防災活動

濱崎彩花・増田朱里・吉田希

山口県立大学社会福祉学部社会福祉学科

1. はじめに

2011年3月11日14時46分東日本大震災が発生した。マグニチュード9.0震度7という巨大地震と共に津波の被害を受け戦後最大の災害となった。現在、死者 3523 名、行方不明者 2552 名という状況である。この東日本大震災をきっかけに、寄付型ボランティアツアーに参加した学生 2 名と公益社団法人助けあいジャパンが中心となり2012年きっかけバス 47 プロジェクトが開始し、全国から約 1700 人の学生が福島県・宮城県・岩手県を訪れ、がれき撤去や被災物の発掘、被災地視察を行った。プロジェクトは運営資金の問題等により打ち切りとなったが、「東北に一人でも多くの学生を連れていきたい。」との思いのもと 16 名の学生により 2014 年「つながり大作戦」が創設された。

	きっかけバス17プロジェクト	つながり大作戦
2011	3月　東日本大震災	
	きっかけバス17プロジェクト 企画 「学生2名」 「(公社)助けあいジャパン」	
2012	7月・8月 **きっかけバス17プロジェクト 実施** 全国1700名の学生がボランティアに参加	
2013	活動の打ち切り	
2014		**つながり大作戦 創設** きっかけバス17プロジェクトに参加した学生有志が創設 全国11支部 → 現在は6支部 (山梨・愛媛・徳島・山口・宮崎・鹿児島)
2015 以降		3月 **「全国メンバー合宿in東北」** 被災地の現地視察やワークショップ など 全国の学生や社会人にも参加を呼びかけている 随時 **ボランティア活動** 「つながるDAY」「東北物産販売会」など

＊図１：つながり大作戦の経緯

2. つながり大作戦について

2−1　理念

つながり大作戦の思いは「過去の災害から学び未来につなげる」である。その思いのもとに 3 つの柱を立てて活動している。

1 つ目は「教訓」の風化防止である。つながり大作戦は「東日本大震災から学んだ教訓」を大切にしている。同じことを繰り返さないようにその教訓を日本中の人たちに伝えてほしいという現地の方の思いを胸に活動している。

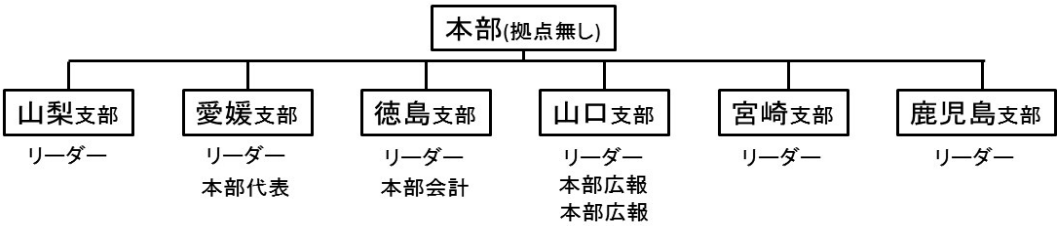
2 つ目は「つながり」の風化防止である。震災から 6 年が経つ今、全国社会福祉協議会の調べによると、被災地に関わる人数が震災当時の約 18 万人から約 3000 人にまで減少している。しかしつながり大作戦は、被災地に関わる人数が減っているからこそ「被災地と私たち、私たちと地元、被災地と地元というつながり」を大切にしている。つながり大作戦はひとつひとつのつながりから日本全国を大きな防災の輪を作ることを目的とする。そして、次に来る災害に向け全国の学生のつながりを広げていくことを目指している。全国に仲間がいることで、日本の災害に敏感になり災害に対して抱きがちな「自分は大丈夫。」という気持ちを除き、自分事として捉えることができる。そして、このつながりが災害時に全国ネットワークとして活躍する。

3 つ目は「復興」の風化防止である。震災から 6 年経とうとしているがまだまだ復興は終わっていない。メディアで報道されることが減った被災地の現状を忘れないことを大切にしている。

また、全国にいる学生だからできる復興のかたちを考えている。

2－2　組織体制

つながり大作戦は現在全国 6 支部、メンバー70 名で活動を行っている。各支部からリーダーを 1 人ずつ配属し、本部は代表・会計・広報の 4 名で構成されている。拠点地は存在せず、本部とリーダーはテレビ電話を通じて定期的に会議を行っている。つながり大作戦も 3 年目を迎え、山口支部の 3 期メンバーは 2017 年 2 月現在、山口大学 1 名、山口県立大学 11 名計 12 名で活動している。



＊図２：つながり大作戦の組織図(2017 年 2 月現在)

＊表１：山口支部の人数の推移

	山口大学	山口県立大学	東亜大学	合計
1期(2014)	7人	3人	2人	12人
2期(2015)	3人	6人	0人	9人
3期(2016)	1人	11人	0人	12人

2－3　つながり大作戦活動

2－1 で述べた理念の下この団体では 3 つの活動を行っている。

1 つ目は「つながる DAY」である。全国で同じ時期に同じ内容の企画を実施する。これまでには停電時に使用できる「キャンドルづくり」、大切な人へのメッセージの写真を集めて作った「モザイクアート」、子どもたちと一緒に避難袋を作った「防災セミナー」、非常食や東北の特産物の「試食会」を行った。つながる DAY を通して参加者が防災や命について考えるきっかけを作っている。

＊写真１：全国メンバー合宿 in 東北
(2016 年 2 月 25 日撮影)

2 つ目は「東北物産販売会」である。東日本大震災で被災し、現在は、再建した生産者から取り寄せた食品を、大学祭や地域のイベント等で販売している。現地に足を運ぶだけでなく、「全国各地にある学生団体だからこそできる復興支援の形」としてこの販売会を定期的に開催し、東北の魅力を伝えている。

3 つ目は「全国メンバー合宿 in 東北」である。メンバー間のつながりを深めると共に被災地の現地視察とワークショップを通して東日本大震災からの教訓を学び、緊急時に動き出せる人材に

なることを目指す。

つながり大作戦全体で行っていることは以上の 3 つだが、それらの活動に加え、各支部それぞれ地域に合った活動を行っている。そして、それらの活動が地域の新聞・ラジオ・ＴＶなどに取り上げられている。

3. 2016 年度つながり大作戦山口支部の活動報告

山口支部の活動としては、山口大学（姫山祭・常盤祭）と山口県立大学（水無月祭・華月祭）の 4 か所の大学祭にて東北物産販売会を行った。6 月と 9 月には全国のメンバーと熊本ボランティアに参加し、現地のボランティアスタッフと共に瓦礫撤去作業や農園再築の手伝いなどを行った。また、10 月には防府市の富海地区の防災訓練に参加し、そこでは救助者体験及び防災啓発活動を行った。12 月には山口県立大学にて「つながる DAY」を開催した。山口支部では、学生や教員にアルファ米と東北物産販売会で販売している缶詰を使用して作った山口の郷土料理けんちょうを提供し、食から防災を考えてもらうイベントを開いた。今後の予定として、3 月 7 日から 3 日間、東北で全国メンバー合宿を行い、現地視察やボランティア、ワークショップを行う。また、3 月 25 日には防府市で行われる防災フェアに参加し、先日視察した東北の現状報告および東北物産販売会を行う予定である。

＊表２：2016 年度山口支部活動内容

日時	場所	活動内容
2 月 22 日～26 日	宮城県・岩手県	全国メンバー合宿
4 月 17 日	山口市・平川交流センター	つながる DAY(キャンドル作り)
4 月 25 日	山口県立大学	つながる DAY(キャンドル作り)
6 月 4 日	山口県立大学(水無月祭)	東北販売物販店
6 月 25 日・26 日	熊本県益城町	熊本ボランティア
7 月 30 日	山口市すぎのこ学級	つながる DAY(防災セミナー)
9 月 28・29 日	熊本県益城町	熊本ボランティア
10 月 29 日	山口県防府市	防災訓練
10 月 30 日	山口大学(姫山祭)	東北販売物販店
11 月 5 日・6 日	山口県立大学(華月祭)	東北販売物販店
11 月 26 日	山口大学(常盤祭)	東北販売物販店
12 月 9 日	山口県立大学	つながる DAY(試食会)
3 月 7 日～9 日	宮城県・岩手県	全国メンバー合宿
3 月 25 日	山口県防府市	防災フェア

4. 課題・考察

これまでの活動を通して課題と考察を 3 つ述べていく。

1 つ目は人材の確保についてである。図 2 にもあるように現在、山口支部の山口県立大学のメンバーは増加しているが、山口大学のメンバーは減少しており、その他の大学、専門学校のメンバーはいない。山口県立大学のメンバーがほとんどを占めているため、他の地域の情報を得るこ

とが難しく、山口支部の活動範囲が山口市宮野地区に集中しているというのが現状である。
したがって、メンバーを確保することで各学校の防災意識の向上、そして山口県内の防災意識の向上につながるのではないかと考える。

2 つ目は活動資金の確保についてである。この団体の活動資金は、東北物産販売会の売り上げと各メンバーの自費だけであり、不足している現状である。大学公認のサークルでないため、大学から助成金や補助を受け取ることが不可能なので、学生の金銭面での負担が大きい。したがって自治体や民間からの助成が受けられるようにしていきたい。そのためには助成を受けられる機関や制度を勉強し、道を模索していくことが必要である。そして、助成金が受けられるためにも、これからの活動をしっかりしていきたい。

3 つ目は学生を呼び込むための企画力である。イベントや防災啓発活動を行っても、企画力がないため一部の人しか来場しないという傾向がある。その背景には山口県は歴史的に見ても大きな震災が少ないということから地震に対する意識が低いのではないかと考えられる。また学生は災害の経験がないため危機感がないことや災害に対するイメージがしにくいと感じられる。つまり東日本大震災の教訓を生かした防災意識の向上を促したいが、伝えられる力がないため、学生に伝えきれておらず、物販や非常食の試食等などが各自の防災意識へ繋がりにくいのではないかと感じる。多くの方にイベント等に参加してもらい、防災意識への向上につなげていくには、多方面からのアプローチが今後必要になっていくのではないかと考えられる。

5. 展望

これまでの活動は「防災」という言葉に捉われすぎて、学生が中々集まらなかった。参加者に堅苦しい印象を与えているのではないかとこれまでの活動経験から感じる。今後は学生団体だからこそできる、学生の立場での防災活動を考えていきたい。例えば、趣味の料理や音楽、ファッション、大学で学んでいる分野など多方面から展開して、参加者の興味を引き、防災につなげていく活動を考える必要がある。そのためにも山口県立大学、山口大学のメンバーの増加は勿論、その他の大学、専門学校のつながりを構築したい。また、学生以外の防災士や防災団体、自治体などとも積極的につながりを持ち、そして、様々な人々に応援や支援をしてもらう団体に成長したい。

私たちが親になったときに次世代に伝えられるように防災について興味をもち、学ぶことが今の学生に必要なことであると考える。したがって、私たちはその防災を学ぶきっかけづくりを学生ならではの立場でできることをしていきたい。

参考文献

・復興庁　東日本大震災災害関連死者数（平成 28 年 9 月 30 日現在）
http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-6/20140526131634.html
・全社協　被災地支援・災害ボランティア情報　災害ボランティアセンターで受け付けたボランティア活動者数の推移
https://www.saigaivc.com